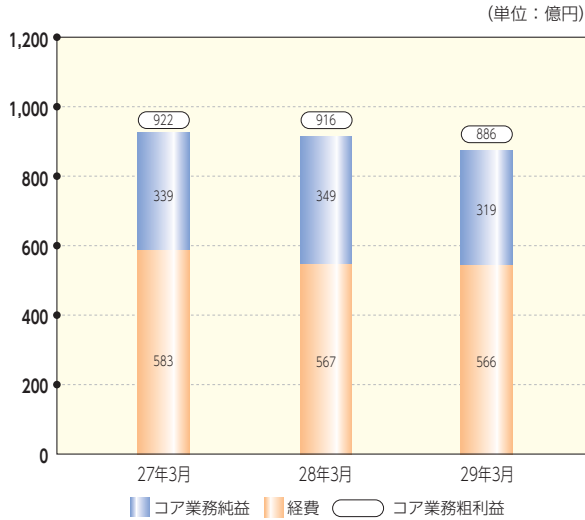


業績ハイライト

単体決算の状況

■ 損益の状況

1. コア業務純益・経費（単体）

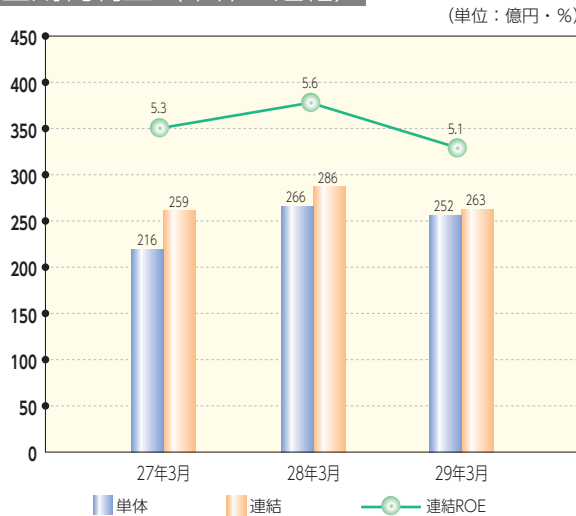


中小企業貸出と個人貸出を合わせたリテール貸出を増強しましたが、低金利の継続に伴う貸出金利回りの低下による減益要因が貸出増による増益要因を上回り、コア業務純益は、前期比29億円減益の319億円となりました。

(注) コア業務粗利益は、預金・貸出金などの利息収支を示す「資金利益」、各種手数料の収支を示す「役務取引等利益」、債券などの売買損益を除いた「その他業務利益」から構成されます。

コア業務純益は、「コア業務粗利益」から「経費」を控除したもので、銀行の本来業務の収益力を表すものです。

2. 当期純利益（単体・連結）

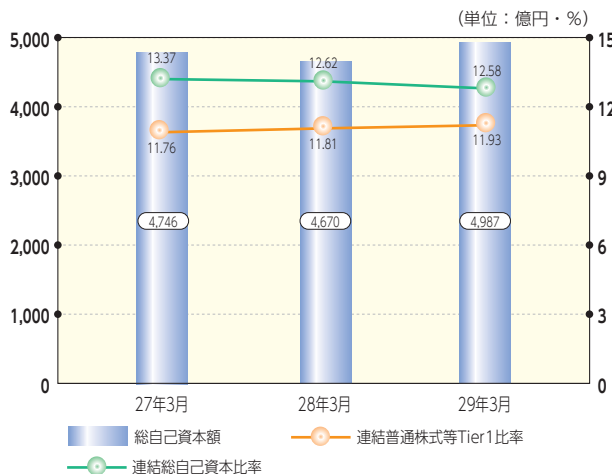


当期純利益（単体）は、コア業務純益の減少などから前期比13億円減益の252億円となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益（連結）は、前期比23億円減益の263億円となったものの、連結ROE（自己資本利益率）は5%台の水準を確保しました。

(注) ROE（自己資本利益率）は財務上の利益率であり、当期純利益を自己資本額（期首期末平均）で除して算出した割合です。

■ 自己資本比率の状況（連結）

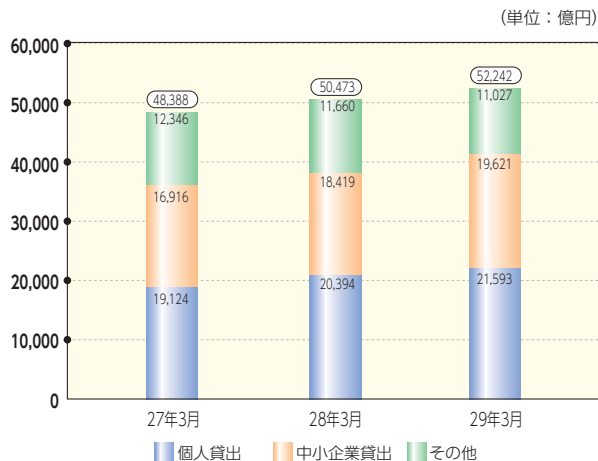


連結総自己資本比率（速報値）は、12.58%と引き続き高水準を維持しました。

当行（国際統一基準行）は、バーゼルIII基準による自己資本比率を算出しております。同基準において、4.5%以上の普通株式等Tier1比率、6%以上のTier1比率、8%以上の総自己資本比率の確保が求められております。

(注) 自己資本比率（バーゼルIII基準）は、国際決済銀行（BIS）の基準に則り、リスクに応じて計算された資産に対する「自己資本」の割合を示し、銀行の健全性を示す重要な指標のひとつです。なお、当行は、海外営業拠点を有する国際統一基準行です。

貸出金の状況（単体）

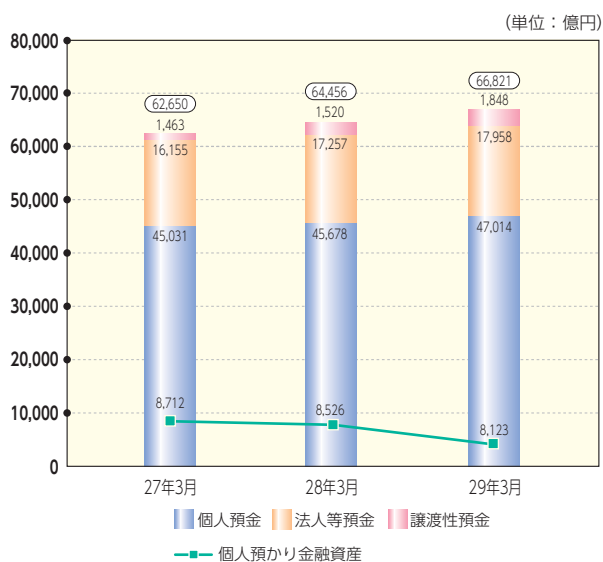


貸出金は、大企業貸出が減少しましたが、中小企業貸出（※）と個人貸出からなるリテール貸出が年率6.1%と順調に増加したことから、前期末比1,769億円増加（年率3.5%）し、期末残高は5兆2,242億円となりました。

個人貸出は前期末比1,199億円増の2兆1,593億円、中小企業貸出は同1,202億円増の1兆9,621億円となりました。

（※）除く、東京・大阪支店の貸出および地方公社向け貸出

預金等の状況（単体）

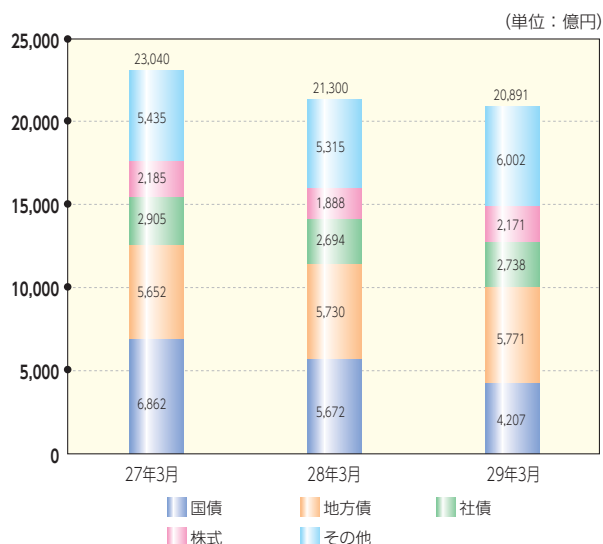


預金等（含む譲渡性預金）は、安定的な増勢を維持して前期末比2,365億円増加（年率3.6%）し、期末残高は6兆6,821億円となりました。個人預金は前期末比2.9%増の4兆7,014億円、法人等預金は同4.0%増の1兆7,958億円となりました。

個人預かり金融資産（※）は、前期末比403億円減少し期末残高は8,123億円となりました。

（※）投資信託、公共債および年金保険等の合計残高

有価証券の状況（単体）



有価証券は、金利水準など市場動向を注視しつつ適切な運用に努めた結果、前期末比408億円減少し、2兆891億円となりました。国債は、前期末比1,464億円減少の4,207億円となりました。

なお、その他有価証券の評価損益につきましては、株式が前期末比179億円増加しましたが、債券・その他が同260億円減少したことから、全体では前期末比81億円減少の1,534億円となりました。